

連載小説「Q」第一部

池窪弘務



——物語は無垢で仕事熱心な青年大谷光一君が、戸建て住宅団地の一番奥にある小さな家のインターホンを押したことから始まった。

彼がマニユアルやパンフレットがぎっしりと詰まった鞆と、一体二kgの商品が入ったキヤリーバッグを引きずりながら、百軒あまりの住宅団地に迷い込んだのは、二〇二六年七月二十三日の大暑、最高気温四十度を記録した日だった。

彼の目的地が奈良県S郡T町大字Tの明生<sup>めいせい</sup>団地だったので、迷い込んだという表現は適切でないかもしれない。しかし、汗まみれになり、意識もぼんやりして、ひたすらにインターホンを押して歩く彼の姿は、迷路に迷い込んだハツカネズミのようだった。

彼は犬型ロボット『愛慕<sup>あいぼ</sup>』、——すなわち僕の——、セールスマンである。昔はS社の製品であったが、今は中国で作っている。技

術力の高い中国にS社が丸投げしてしまった。それをS社が逆輸入している。名前も『アイボ』から『愛慕<sup>あいぼ</sup>』になった。

二

彼の仕事は7時八時きっかりに届く会社からのメールを見ることから始まる。会社に行く必要はない。メールには今日一日の彼のスケジュールが分刻みで書かれている。現地までは1時間半かかると分かって少しホツとした。行き帰り三時間はGPSを気にせずにすむ。

大谷光一は1DKの社宅に住んでいる。玄関からトイレと風呂、次に台所と居間、寝室が続く。独り暮らしには十分すぎる住まいである。一つの階に全く同じ部屋が十個並んでいる。部屋と言うよりユニットと言った方が適切だろう。十ユニットが五階建てのビルにきっちりと収まっている。ルービックみたいな。彼はその三階の五号室に住んでいる。都

会の真ん中だから、何らかの雑音はいつもしている。人の声、車の音、電車の音、悲鳴。セールスマンが都会に住む理由は、交通の便がよいからだ。何処にでも行ける。セールスマンは何処にでも出かける。

### 三

光一は一浪して大学に入り、バスケット・ボールに熱中しすぎて留年した。バスケット・ボール同好会は、人数が揃えばじゃんけんで敵味方に分かれ、バスケットに興じる気楽な集まりだった。男女も区別しなかった。ただ、眼の前でバストがゆっさゆっさと揺れるのには少し閉口した。

彼は大学にいる時はいつも体育館にいた。競技をしている時以外は、場所取りに奔走していた。たとえ三十分でも体育館のコートが空くと、LINEで仲間を集めた。学部も服装もバラバラな連中が三々五々集まって来た。多すぎる時はじゃんけんで選んだ。誰も来ない

時もあった。その時は、一人のエアバスケット。

同好会の中で、彼だけがバスケット部の正規のユニホームを着ていた。ルールもアバウトで、ひたすらボールを取りっこして籠に入れるのに熱中した。いつもどちらが勝ったのか不明のまま終わった。

そうしているうちに落第した。

#### 四

一人っ子だったので親も大目に見てくれた。ようやく卒業して、駄目元でS社の入社試験を受けた。S社の子会社で定年を迎えそうな光一の父親が勧めたからだ。父親にコネがあったわけではない。父親は、まさかと言うこともあると泥酔のついでに、光一に言った。光一はそれをまともに受けて、受験した。

入社のペーパーテストは下の方から数えた方が早かったが、常務の一人が彼を強く押し

た。

——近頃では珍しい無垢な目をしている。

常務は十年程前に大リーグで投打の二刀流で活躍した大谷翔平のファンだった。面接に現れた光一は、上下に十センチほど縮めた大谷翔平にそっくりだった。大谷翔平も野球一筋の無垢な目をしていて。大谷光一もバスケット一筋の無垢な目をしていて。

光一の父親は手放しで喜んだ。——息子がS社に入社しましてねえと、聞かれもしないのにまわりに言っただけで廻った。

常務の気まぐれで入社した彼はいきなり壁にぶつかった。一台も愛慕が売れなかったからだ。同期入社秀才達は次々に愛慕を売りまくった。彼らは言った。——時代が売ってくれるのだよ

五

確かに世の中は孤独な老人で溢れていた。彼らはペットを飼うには年を取り過ぎていた。実際に飼い主に死なれ餓死するペットも世の

中に多数いた。死んだ飼い主をペットが食べてしまうという痛ましい事件も起きた。

そんな世相を背景に愛慕は売れに売れ、品切れさえ心配された。だが、彼は一台も売れなかった。彼の心の奥底に、彼さえも気づいていない疑念があった。それは水晶の欠片かひのようにいつもキラリと光っていた。

——年寄りを騙していないかという疑念だった。

## 六

八時半きっかりにGPS付きのスマホを内ポケットに入れて光一は部屋を出た。「行つてきます」

と、声に出して言う。

エントランナスでいつも出会う女性がいる。彼女の名前は、山本沙苗さなえ。彼女が覗いていた郵便受けに書いてあった。何階に住んでいるのかは知らない。彼女の動きは速い。挨拶する間もなく、光一の視界から消えている。彼

女は真っ直ぐにS社に向かうのだろう。自分  
は誰と出会うかも分からない旅に出る。

七

ビルの谷間を十分程歩いて、地下に潜れば、  
大阪駅に出る。人が固まりになって動いてい  
る。まるで蟻の集団だ。これでも在宅のサラ  
リーマンが増えて、通勤客は去年より一割は  
減ったと言う。環状線に乗りJR鶴橋で近鉄  
の鶴橋駅へ乗り換える。ここもまだ都心へ進  
む通勤ラッシュは終わっていないが、鶴橋駅  
から出て行く電車は、ガラガラだ。夏休みだ  
から学生もほとんどいない。冷房がよく効い  
ている車内は快適だった。彼は遠足にでも行  
く気分で少しずつ田んぼが増えていく車窓を  
眺めていた。やがて電車がトンネルをぬける  
と、奈良県である。

八

橿原市の大和八木駅から乗り換えて二つ目



の笠縫駅で降りた。無人駅だった。都心まで一時間半の通勤圏とあるが、この時間は誰も乗り降りするものはなかった。自動改札をぬけると、蟬の声が夕立のように落ちてきた。スマホで道順をチェックする。川に沿った細い道の方が近そうだ。だが、簡易舗装の道は、キャリーバッグを転がすのに適していない。鞆と一緒に運ぶのは難儀だった。鞆を肩にかけてキャリーバッグを転がすと、全身から汗が噴き出した。汗はすぐに乾き塩になった。駅前にあった自販機で水を買うべきだったと後悔したが遅かった。墓場の向こうが国道らしい。竹藪の横をぬけると国道を挟んで巨大なスーパーマーケットの看板が見えた。あそこで水を買おう。しかし、GPSに記録が残るから長居は出来ない。昼食には早すぎる。

九

スーパーマーケットは意外と閑散としていた。出会うのは老人ばかりだった。自動販売

機でスポーツドリンクを買った。五百mlを一気に飲み干した。もう一本は三五〇mlにした。これ以上荷物を増やしたくなかった。

スーパーマーケットの北側は道路になっており、道路に沿って川が流れていた。歩いてきた川である。国道を潜りまた現れた。ここから名前が『かがり川』と変わるらしい。橋の名前が『かがり橋』になっていた。

百メートルほど川に沿って歩道を歩けば閑静な住宅団地に入る。目指す明生<sup>めいせい</sup>団地は、スーパーマーケットの巨大な影に隠れるように肩を寄せ合っていた。

十

団地の入り口にある鳥瞰図を見ると、川沿いの道路は真っ直ぐ東に延びている。その道と並行して二本の道路がある。団地を横切る百メートルほどの北南の道路が四本。九つのブロックの間にぎっしりと名前が書かれた家がある。よく見ると名前が白いペンキで消さ

れた家が混じっている。

川に沿ってフェンスがはられている。川の向こうにも住宅団地がある。フェンスに沿って五十センチほどの土手があるが、雑草に被われている。花壇も無残な姿になっている。

光一はとにかく一軒一軒インターホンを押していかうと思った。

真夏の真昼、インターホンは一服の清涼剤を得るための唯一の手段でもあった。とにかく冷房の効いた場所に入りたかった。しかし、インターホンを押す度に期待は裏切られた。ほとんど応答がなかった。たまに相手が出ても、名乗ると無言で切られた。

十一

光一は何回インターホンを押しただろう。同じ家で二度押す勇気がなかった。闖入者は次の家に向かって立ち去るしかなかった。

一人だけ老人に出会った。花に水をやっていた。光一は、「焼け石に水」という言葉を

思い出して、少し笑った。美青年の笑顔は美しい。

川沿いの道路は団地の突き当たりまで四百メートルほど延びていた。

住宅の一番奥まで来てしまったようだ。そこから道が細くなり山並みが見える。桜並木があり、木陰がありそうだ。光一はその道を少し歩いてみようと思った。

## 十二

振り返っても山並みが見えるから、盆地であることが分かる。スマホで見ると背後に見えるのが二上山、右手に大和三山、正面が三輪山。

車一台がやっと通れる細い道の南側は田んぼと畑である。川を隔てて北側の田んぼの向こうに疎らに農家が見える。農家なら話を聞いてくれるかもしれない。しかし、それはダメだ。会社の指示は明生団地である。

彼は、橋の欄干のそばに腰を下ろして、貴

重なスポーツドリンクを飲んだ。ただ汗にな  
って吹き出すだけだけれども。橋のそばに地  
蔵がいた。綺麗な花が供えてある。スマホで  
地蔵を探すと、それぞれの橋のたもとには地  
蔵がいるようだ。旧農村なのだろう。明生団  
地に地蔵はいない。手を合わせると、地蔵が  
微笑んでいるように見えた。

一息ついたら、また、蝉の声が夕立のよう  
に落ちてきた。ここにこうしていても埒があ  
かない。彼は引き返すことにした。

### 十三

団地内は東西に三本の道が通っているから、  
真ん中の道を、インターホンを押しながら、  
Uターンして帰ろう。三本目の道は昼飯を取  
ってからにしよう。

——スーパーマーケットにフードコートが  
あった。

団地まで引き返すと、団地の端に空き地を  
挟んで家があるのに気づいた。通り過ぎたは

ずだが気づかなかった。他の家に比べて敷地が半分ぐらいしかなかった。三十坪ほどだろう。その家のインターホンはまだ押ししていない。

——はい

返事があった。

—— S社から来ました

—— 少々お待ちください

光一はここに来るために暑い最中、歩いてきたのだと思った。表札には田代順平とあった。

#### 十四

田代順平の家は明生団地の一番奥にある。角地で他の六十坪の区画より二十坪ほど狭い。結婚以来五十四年もここで住んでいる。

団地は一〇三軒。空き家が十％。T町では一番少子高齢化が進んでいる。平均年齢が七十歳を越え、子供は殆どいなくなった。

順平が住み始めた一九七〇年前半は、高度成長が終わりを告げた時期だった。地価は上がり始め、私鉄のあちこちにニュータウンが出来はじめていた。ローンを組めば値段も手の届くところにあった。家族のためにも家が必要だった。「土地付き一戸建」はなんとも魅力的な言葉だった。

のどかな農村だった奈良県S郡T町は、一気に土地の開発が進み、あちこちに土地成金が誕生し、ミニバブル状態だった。

## 十五

明生団地は一九七〇年に湿地帯（沼）を埋め立てて市街化調整区域として造成された。

最初は、モデル住宅が一軒と——明生団地分譲中の幟がはためていた。テントがあり、事務机が置かれており、中年の痩せた女性が一人で店番をしていた。家は三、四軒で他は六十坪程度に区画された空き地だった。それがポツポツと売れ始めた。そして、七十年代

半ば第二次ベビーブームの訪れと共に、雨後の筍のように一気に増えた。

三十歳過ぎになり、仕事も家庭も安定してきた。そろそろ賃貸マンションを飛び出す時期になった。家賃の分をローンに回せばなんとかなる。通勤時間が一時間以内の土地はとても手が出ない。通勤時間はギリギリ一時間三十分以内で妥協しよう。働き盛りのサラリーマンはマイホームを目指した。かくして、土地に縁もゆかりもないサラリーマン達の新興団地が出現した。彼らは子供を二、三人つくり、中流意識が強く、マイホーム主義だった。そして、殆どが戦争を知らない世代だった。

## 十六

成人した彼らの子供は同居を望まなかった。彼らも望まなかった。二世帯が住むには土地が狭かったし、親も子も戦後の個人主義の中で育っていた。家制度など無縁だった。



ほとんどの子供は結婚と同時に親元を離れた。実家は結婚までの下宿屋みたいだった。核家族は核分裂を繰り返し明生団地から出て行った。

三十代中心の世代がローンで家を買って、定年後五年間嘱託で働き、ローンを返し終えた時が六十五歳。年金生活者になって十五年。子供の姿は消え、昭和の新興団地は限界集落になっていた。

四十年間往復三時間の通勤に耐えたサラリーマン達は、今は、年金、泥棒とまで言われている。

田代順平もその典型的な老人の一人だ。三十七年間大阪市内の病院薬局に勤めた。通勤時間は三時間。二万六千六百四十時間の通勤時間、つまり三年近く車内にいた。

田代順平は昭和二十一年（一九四六年）大暑の日に生まれた。五年早く生まれたら戦争を背負っていた。田代順平には何も背負

うものがない。田代順平は、今の世の中には二種類の人間がいると思う。戦争体験者と非体験者だ。田代順平は非体験者だ。母のお腹の中にもいなかった。田代順平の中に戦争はない。その意味で、令和元年生まれと一緒にだ。小学校の屋上に焼夷弾が埋まっていた。田代順平の戦争体験ってそんなもんだ。

## 十七

順平は団塊の世代の一つ年上だ。提灯の真ん中より一つだけ年長である。だが、いつも競争をしていた気がする。その上、一年浪人をしたから、もろに最も人数の多い年代に落ちた。その時は、長い人生でたった一年じやないかと思った。親も教師もそう言った。だが、その一年は思った以上に重かった。大学では年下の同級生が順平を呼び捨てにした。クラブに入れば同い年の奴に使われる。卓球部では学年が一年上の同い年の先輩が順平を奴隷扱いした。彼は早生まれだったから、実

際には二歳年下だった。

就職してもそうだった。

一年早違えば先輩だ。年功序列の社会での一年遅れは取り返せなかった。一步の足踏みが最後まで響いた。順平を一瞬にして追い越し、薬局長になったのは、同期で公立大出の福井のHだった。彼も一つ年下で早生まれだった。

十八

五十五才の時、後輩に役職を抜かれた。それからは定年までひたすら守りに入った。一番下の役職で、仕事は新卒と同じだった。出世なんかとうそぶいていたが、無関心ではなかった。順平は同僚や部下には「いい人」で通っていた。人に嫌われるのが耐えられなかったから彼らの味方のように装った。その為に上司に反抗した。上司にも恵まれなかった。正座して、愛想笑いを浮かべて病院の幹部にお酌するHの姿を思い出した。あれは出来な

い。私学の出であるのも関係した。いくつもの理由を指で数えて自己満足した。

だが、定年から四、五年も経つと、客観的に自分が見え始めた。やはり能力がなかったのだ。現役で合格する能力。公立大学に合格する能力。お世辞を言う能力。全ての原因はそれに尽きる。

「いい人」は「どうでもいい人だった」と気づいた。「いい人」は「無能」と同意語で、部下は裏では笑っていたのだろう。

## 十九

「しかし」と順平は反論する。仕事や出世に集中できなかったのは、夢のせいだった。順平の夢は小説家である。小さい頃からの夢だった。小学校の時、朝礼の壇上で遠足の作文を読んだ。高校の時読後感想文が入選した。褒めてもらったのはその二つぐらいだ。小説家になる為に最初は教師になろうとした。教師には夏休みや春休みがある。とても、不純

な動機だった。教育大学（その頃は学芸大と  
いったが）の受験に失敗して、一浪後に、最  
初に受験して合格した大学に入った。私立の  
薬科大学である。考えもしなかった選択であ  
った。

——要するにどこでもよかった。

クラブ活動も文芸部ではなかった。理科系  
の文芸部など自分とレベルが違うと思ってい  
た。身体を鍛える方が大事だと、卓球部に入  
った。四年間ひたすらラケットを振っていた。  
卓球が好きだったわけではない。素人に毛の  
生えた程度だが、殆どが大学に入ってから卓  
球を始める同級生よりは強かった。だが、そ  
れも内輪のことで、他流試合にはだらしなく  
負けた。卒業後は、殆ど卓球をやらなかつた。  
小学生の娘に負けてからは全くやめた。

結局は、——いつも敗者だった。いや、負  
ける前に逃げた——。順平はそう呟いて深い  
ため息をついた。

順平は父と同じ二十六才で結婚し、子供を作り真面目に働いた。社会的な責任は果たした。でも、それだけだった。いつも小説を考えて、理想と現実の間で喘いでいた。一念発起、五十才の時に、会社を辞めて作家を目指す、と、妻に宣言した。説得しても、妻は首を縦に振らなかった。次の日から満員の通勤電車の生活に戻っていた。ある意味それは心地よい繰り返しだった。焦るまいと順平は思った。才能はあるのだ。それに遅咲きの作家はごまんという。いつか作家デビューする。だが、いつまでも夢は夢のままだった。

定年後もいくつも小説を書いて応募したが、予選も通らなかった。五十才の時短気を起こさずによかった。あれから無収入になっていれば、一人娘を大学まで出すことは出来なかっただろう。今の生活もなかった。小説一本にかけたところで、才能のなさをおもい知らされただけだったろう。これでよかったのだ。

だがそう思う度に、とても切ない気持ちになった。確かに人生は結果ではないのだが。

ある時、「人生はつまらん」と洩らした義父の言葉が蘇った。あの時、初めて義父に親近感を覚えた。

妻に小説を読ませても、「わからへん」の一点張りだった。とうとう最後には、

——なんでもええから、いいよと言え！

無理難題を言ったもんだ。「つまらん」とも言えず、下手に感想を言うと、十数倍の解説が返ってくるのを知っていたのだろう。家族も票を入れなかった町会議員の候補者みただいだ。——

妻が順平に求めたのは平凡な薬剤師だった。

二十一

——今日は大暑か。

田代順平は、ため息と一緒に独り言ちた。

正暦二〇一九年。令和元年。いつのまのにか元号が代わっていた。昭和、平成、令和。そ

して、今日で七十三歳になる。長い年月を生きてきたもんだ。それも今では一瞬のような気もする。七十三年も過ぎ去ってみれば薄い本のようなものだ。本の中には記憶という曖昧な文字で書かれた頁がひっそりと住んでいゝる。しかし、何の記憶もない無数の頁は失われたままだ。それが、順平の個人的な記憶だ。孤独なもんだと思う。誰もが一人である。一億人いれば一億人の孤独がある。

七十三年……。本当にそんなに長い時間生きてきたのだろうか？ 年老いた自分がその証拠かもしれない。

妻は今年の六月に受けたT町の検診で乳がんが見つかった。

「女やったんやなあに」  
と、まず言ってしまった、妻の怒りは沸点を超えた。

鹿児島いぶすきの指宿いぶすきで陽子線治療を受けることになった。治療自体は簡単で一日一回十五〜三十分程度治療照射するだけだという。



「ゆつくり温泉に入って、おいしいもん食べて、五十年のあか落としますわ」

と、妻は遠足気分で行った。

順平の二ヶ月間の一人暮らしが始まった。

順平は一日を生きるのがやっとである。今日より明日、明日より明後日、段々命が短くなる。

妻は民間の介護サービスの手続きや夕食の宅配など後の始末をきっちりとしていった。週二回サービスが受けられる。週二回サービスが受けられる。火曜日と金曜日にヘルパーさんが来てくれる。和田さんは掃除と洗濯、山口さんは買い物である。時間は一時間と決められている。

二十二

——今日は大暑か。

順平はまた呟いた。

枕元の電波時計を見た。クーラーをつけて寝たから、温度は二十三度。2019年、七月二

十三日。六時。火曜日。カーテンは、もう、明るくなっている。

——また一日が始まる。

空しきで胸が痛くなる。死にたいと思う日もある。

——なぜ生きなければならぬのか。

また判で押したような一日が始まる。

トイレで小便をする。次に洗面所で、顔を洗う。歯を磨く。寝間着を着替える。うんざりする繰り返した。

FOR ～ NEXTで何十万回廻る。～に順平が入る。順平が作ったおもちゃみたいなプログラムだった。

## 二十三

書齋に行く。

四畳に満たない部屋だが、順平にとって砦である。

順平が死守した部屋である。

パソコンと本棚だけの部屋である。

机の上に、でーんと今年買ったF M V ESP  
RIMO 4 K液晶二十七インチが坐っている。

三十秒で立ち上がる。

テレビもネットもサクサク動く。テレビ録  
画も予約すればその時間にパソコンが立ち上  
がり、録画が終わればパソコンのスイッチが  
切れる優れ物である。

モノクロのノートパソコンから始まった順  
平のパソコン歴の最終形だと思う。

順平の最後のパソコンになると思う。

ハードディスクには順平の全作品が収まっ  
ている。

よくこんなにかいたものだ。

今でも自信のある作品があるが、一切日の  
目を見ることはなかった。

家族が五人の時は、さすがに気がひけたが、  
この部屋には誰も入れなかった。

妻と二人になっても、十年間はこの部屋で  
眠っていた。

去年の冬から、台所兼居間の横の和室で寝

るようになった。

小説も書かなくなった。書齋にいる時間も激減した。

## 二十四

朝のルーチン。

まず最初の仕事はお経を唱える。順平の家には仏壇がないが、いつの間にか習慣になった。

——開経偈。

——般若心経。

——光明真言を三遍。

——南無大師遍照金剛を三遍。

次ぎに、糖尿病の薬であるビクトーザ皮下注を〇〇単位腹に打つ。ネットを見る。パソコンをシャットダウンする。年寄りの顔が映っている。

## 二十五

ポストから朝刊を取り、居間兼台所に帰る。

居間の窓を開け放す、同時にクーラーのスイッチを入れる。次にテレビをつける。

次の仕事は朝食。

トースト一枚（炭水化物）、冷凍唐揚げ（蛋白質）、牛乳（総合）、卵（総合）、レタス一枚（野菜）と梅干し一つ。梅干しは『低ナトリウム血症』の恐怖が残っているからだ。正常値になってから四年以上も経つのに、お守りみたいなものだ。

これが順平の朝食である。トーストがご飯か餅に変わることもあるが、他は殆ど変わらない。

十時過ぎになると、コープが届けてくれた夕食の弁当を取りに行く。門扉の中に、発泡スチロールの箱に配達員が入れてくれる。配達員とかち合わないように時間を少しずらしている。だが、時にはかち合う。相手も突然出て行くと驚く。三十歳くらいの女性だった。初めて顔を見た。名刺をもらった。殆ど人と会わないので新鮮な対面だった。

パートで働いている。子供を保育所に預けて、仕事の帰りに子供を迎えに行く。フルに働けば税金が高くなるので上手に計画的に働いている。短い時間に早口で喋った。大変だと思いが活気があった。順平には活気がない。昼はうどんを食べる予定だ。うどんは安い。一玉十七円で売っている。ご飯も安いのでおにぎりにもすることもある。何しろ主食は安い。

夜は、コープの「健康御前（糖尿病食）」。

これが一番高くつく。

これで順平の命は保たれている。入ってくるもの出ていくもの。その差が生きるためのエネルギーなのだろうか。今日もそんな順番で過ぎていくだろう。

## 二十六

今日一日も無為のまま終わるのだろうか。朝食を済ますと、薬を飲む。小一時間かけて新聞を読む。食事の後片付けをして、コーヒを飲んだ後は、横になって、便意が来るの

を待つ。

——排便はとても大事な仕事だ。

今朝はうまく出た。

誕生日も同じタイムスケジュールで進むだろう。

後の予定。

昼食。

午後一時 郵便物を取りに行く。

午後四時 夕刊を取りに行く。蒲団を敷く。

風呂に入る。

コープの「健康御前（糖尿病食）を食べる。

合間には、テレビやビデオを観る。もう、

本は読まない。寝る前に缶酎ハイを一本飲む。

睡眠薬を半分飲む。残りの半分は、真夜中に小便に起きた時に飲む。

そして、一日が終わる。一日一日が死んでいく。

## 二十七

短時間眠ったのかもしれない。不意に起こ

された。インターホーンが鳴っている。

何かのセールスだろう。二、三回放っておけば諦めるだろう。順平はテレビに目をやった。しかし二回目は鳴らない。奇妙な間が生じた。老人は咄嗟に動けない。座卓に両手をついてゆつくりと立ち上がった。

モニターに青年が映っている。知らない顔だ。何かのセールスのようだ。停止ボタンを押そうと思ったが、何故かためらった。通話ボタンを押す。青年は何度も手で顔を拭いた。したたり落ちる汗がモニター越しにでも見える。朝から高温警報をテレビは繰り返していた。

——はい——

順平は言った。

——S会社から来ました——

——少々お待ちを——

玄関の戸を開けると、熱風が吹き込んできた。訪問者の半袖のカッターシャツは絞れるほどに汗で濡れていた。その上彼は律義にネ



クタイを締めている。

二十八

「上がりなさい」

思わず順平は言った。

光一はぺこりと頭を下げた。キャリーバッグと荷物は玄関に置いたまま、順平の後に従った。家の中は別世界だった。

老人の足もとはおぼつかない。時々壁に手を置いた。

「この奥が風呂場や。体を拭いたら、かまへんからタオルは畳んであるのを使たらええ」  
光一は顔を洗った。次にしわくちゃになったハンカチを洗い、思い切り絞り、顔と首筋と胸を拭いた。タオルは使わなかった。そして、鏡に映っている自分の顔に笑顔を投げた。

——天使に会った。

風呂場を出ると、廊下を挟んで居間になっていた。坐卓があり、その前に老人が座っていた。麦茶の二リットル入りが置いてあり、

ジョッキがある。老人は、光一に坐るように促した。

「麦茶しかあらへんけど。どうぞ」

光一はジョッキに麦茶を注ぎ、一気に飲み干した。

「もう一杯いただきます」

「どうぞ。買い置きもあるから遠慮せんと飲み。ところで……」

老人は言った。

「君は誰ですか？」

二十九

光一は急いで名刺を差し出した。

順平は名詞を一瞥しただけで坐卓に置いた。

「今、冷麵を作るところやったんやけど」

「冷麵ですか」

「冷蔵庫の中にある。作ってくれるか。なんや邪魔くそうなって、パンでも嚙つところか思てたんや。一袋二人前やる。あんたも食べたらええ。ハムと錦糸卵入れたらおいしいよっ

て」

順平は、昼食をうどんから冷麺に変えた。かくして光一は冷麺を作る羽目になった。

光一は楽しかった。多分就業規則違反だろう。食べさえしなければ、少しは軽くなるかもしれない。麺を茹で、氷で締める頃には、その決心も揺らいできた。

「あんた上手やなあ」

「よく作るんですよ」

「そうか、ほな食べよか」

「いただきます」

見知らぬ人と食べる冷麺は旨い。

「人とご飯食べるの何日ぶりやろ」

順平は言った。

光一が後片付けに立つと、

「そこに置いといてもろたら後で洗うよつて」

光一は、さっさと中華皿を洗った。

「私はセールスマンです。『愛慕』というロボットを売っています」

「あいぼ？」

「現物を持って来た方が早いですね」

光一は玄関に行き、キャリーバッグから『愛慕』を引っ張り出した。小脇に抱えて、鞆と一緒に居間に戻った。

光一が頭を撫でると、『愛慕』は歩き出した。

順平は『愛慕』をぼんやりと見ていた。

「おもちゃのセールスですか」

『愛慕』は「ワン」と一声ないた。

老人は少し驚いた顔をした。

「嬉しい時の泣き声です」

光一が言った。

「ワアン」

「甘えたい時の泣き声です。頭を撫でて下さい」

順平が頭を撫でると、『愛慕』は尻尾を振った。

光一はマニュアル通り喋っているのに気づいていた。

「テレビをお借りして良いでしょうか」

順平が頷くと、

光一はノートパソコンをテーブルに置いてテレビと接続した。テレビの画面に『愛慕』が映し出される。『愛慕』のデモンストレーションが始まった。順平はテレビの方を見ずに実物を見つめている。テレビの画面は『愛慕』が眠っている動画だ。窓には星が輝いている。

「夜になると眠ります。お腹が空くと電気を食べに行きます」

光一が言った。

三十一

「名前は？」

「まだありません。お客様がつけて下さい」

光一が言った。

「コロにしよう。昔この辺は家も少のうてな

あ。用心悪いさかい言うて、親に押しつけられて飼った犬の名前や。ほつとらかしにして、死んでしもた。四〇年以上前の話やけど。こいつは死なんわな」

「ええ」

と、光一は短く答えた。

——年寄りを騙していないか？

という疑念が心に浮かび上がってきた。

金属のかたまりを犬と称する偽善。電子の

脳が演出する心。先輩に打ち明けると、

——お前はあほか」

と、言われた。

——お客様も了解みだよ」

「コロ」

順平の声に光一は我に返った。コロは、尻尾をふりながら順平に近づき、甘えた声で鳴いた。順平はコロの頭を撫でた。盛んに尻尾を振る。

順平は他のことを考えた。人との会話の時、他のことを考えるのは順平の癖である。だか

ら人との交流が上手くいかない。唐突に話題を変えて、人を驚かせる。光一も自分から話の穂を継ぐことはしない。二人とも沈黙はそれほどひどいやなものでない。

順平は四十年前のことを思い出していた。順平は薬品管理室にいた。前の薬局長の自慢の薬品在庫管理だった。帳簿は一薬品一枚のカードで管理されている。全品目のカードが円形の回転する装置に入っている。そこからガラガラと音を立てて目的のカードを取り出す。入出残、を伝票から記入する。月締めは、それらを全て集計する。

薬剤師一人と事務員一人がかかりきりだった。月末には長時間の残業になった。その仕事を順平が一人でコンピューター化した。コンピューターはNECのPC-9800、プログラミング言語はN88-BASIC。

三十二

「君は、エヌはちはちベーシックって知って

るか？」

光一は唐突な質問に順平の顔を見た。

「知りません」

「プログラムを組んだことは？」

「ないです」

「そんな必要あらへんもんなあ」

「田代さんはコンピューター関係のお仕事を  
されていたのですか」

「いや、薬剤師や。算盤が出来ひんよつて  
パソコンを使うたんや」

「算盤は公文（くもん）で習いました。小学  
校一年の時です。ひと月で止めましたが」

「へえ、公文は算盤もやってるんか。公文先  
生には、高校で数学を習た<sup>なる</sup>」

「公文先生？」

「公文式の元祖や。あの時から小学生に微積  
分を習わしてる言うてたなあ。牛乳瓶の底み  
たいな眼鏡かけてた。答えが出たら、方法は  
何でもええ言うとつた」

光一は黙って聞いていた。



「こんな話おもしろいか」

「勉強になります」

—— マニユアルにあつた。客が昔話を始めたら真剣に聞くこと。同意を求められたら、「勉強になります」と言うこと。

### 三十三

順平は頭の中に色々な仕事仲間を浮かべた。今はその誰とも会うことはない。一度別れたら二度と会うことはない。

—— ほんまにそんなことがあつたんかいなと、不思議な気になる。

医事課からやって来たHさんは、算盤が出来なかつた。電卓専門だったから、人差し指のHさんと呼ばれた。あの時代は算盤の時代だった。ほとけのHさんとも呼ばれて好かれていたが、仕事では、随分軽視されていた。薬品管理室はその点働きやすかつた。田代順平といういやな男がいる以外は。確かに、Hさんにひどいことを言った覚えがある。今の

順平からは想像できない意地悪もした。

Hさんは今どうしているのだろう。人伝にでも聞くことはない。

Hさんは台帳一枚一枚を集計していく。薬価を掛け、納入価を掛け、それらを集計して帳票を作る。Hさんは電卓に没頭していた。その横で順平は、彼の仕事を一行一行コンピューターに命令していた。

### 三十四

「楽しかった。手計算とコンピューターの結果がぴったり合った時は嬉しかった。いつの間にか二人いた仕事場が事務員が一人で一日一時間ほどの仕事量になったんや」

「すごいですねえ」

「せやけど今はちゃうなあ。コンピューターに使われてる。出来たものの上で踊ってるだけや。一人一人がコンピューターをポケットに入れてる時代やもんなあ」

二人とも話の穂が継げない。ぼんやりとテ

レビの画面を見ている。

急に順平は、『枕草子』のCDを青年に見せてやりたくなった。

順平は七十才になる前の三年間ほど『枕草子』の電子訳に夢中になった。そして、七十歳の時にCD付きの本を自費出版した。自分では画期的な本だと思っている。

今も思っている。

「『枕草子』って知ってはるか」

テレビでは、『愛慕』がボール遊びをしていた。

「学校で習いました。「春はあけぼの」しか覚えてませんが」

「それや、それ」

順平はCDを坐卓の上に置いた。

「パソコンに入れて」

光一のノートパソコンを指さした。

### 三十五

枕草子を今の言葉に変えるのは、プログラ

ムを書くのとよく似ている。何が似ているのかと青年が聞けば、順平は答えられなかっただろう。だが、青年は、納得したように頷いた。

「ほら、『あけぼの』にマウスを当ててみて」

光一が言われたとおりにすると、『夜明け』と吹き出しが出た。

「次は、『やうやう』」

「『次第に』って出ます」

「誰にでも読める『枕草子』や。千年超えて清少納言に会える」

「すごいですねえ。僕でも意味が分かる」

「一個一個訳を入れていったんや。あほみたいに」

「そんなことはないです。尊敬します」

「ありがとう。そんなこと言うてくれたんはあんただけや」

順平は胸が一杯になった。涙を隠すためにコロの頭を撫でた。コロは盛んに尻尾を振っ

た。

「よかったらもっていったらええ」

熱心に画面を追っている光一に順平は言った。

「百冊も作ったよって、ようけあまってるねん」

「喜んでいただきます」

「ほな、五冊もろて貰おか。わしはこの犬を飼うよって」

順平は、デモ用の『愛慕』にこだわった。

光一は、契約書の商品名にAIB03279670—01と書き込んだ。契約が終われば、コロになる。

### 三十六

外に出ると北の空に稲妻が光り、雷鳴が響いた。大粒の雨が光一の顔に当たった。光一は嬉しかったのである。あの人に最初の一台が売れたことが。土砂降りの雨の中を走りながら、この仕事はこれっきりにしようと思っ

た。

コロは順平が働きかけなければ何もしない。充電器に坐っている。呼べばそばに来て順平の動きをじっと見ている。ワンと鳴いて尾を振り次の命令を待っている。

「お前はええなあ。食べんでもええし、糞することあらへん」

理解したようだ。コロはワンと短く鳴く。

「生きるは面倒くさい。食べて出して寝て。

なんでこんなことしながら生きてんのんやろ。

お前はええなあ。全部電気がしてくれるんやろ。せやけど、食べる楽しみはあらへん。死ぬのん怖いこともあらへん。犬はなあ、なんかして欲しいから尾を振るんやで。お前は何のために尻尾を振ってんのや」

コロは、上目遣いに順平を見つめ、また、尻尾を振った。

### 三十七

この頃時々ものがなくなる。孫の手なんか

一週間も出てこない。和田さんに買ってきて貰おうと思うがいつも忘れる。何気なくコロを見ると、孫の手を啜っていた。インターホーンが鳴った。

ヘルパーの山口さんの訪問時間は正確だ。午後二時にきっかりインターホーンを押す。どこかで待っていて、二時十秒前にインターホーンの前に立ち、三、二、一、〇で押すのかもしれない。いっぺん外に出て待っていようかと思っただが、まだしたことがない。

一回目の訪問の時、コロを見て、「それ、スイッチ切ってくれませんか」と言った。だから、火曜日の昼食が終わったら、コロのスイッチを切ることにしている。

「今日は」

と挨拶だけ交わして、山口さんは真っ直ぐに風呂場に行く。洗濯機を回す。並行して風呂洗いとトイレ掃除をする。順平は、書斎に避難する。居間の掃除が終わると、洗濯物を持って二階のベランダに干しに行く音がする。

順平は、入れ替わりに居間に行く。山口さんが階段をダツタタと降りてくる。誰もいないから、二階の掃除はやらない。気が向けば順平がロボット掃除機のルンバを放す。四十五分はまたたく間に過ぎていく。言葉を交わす間もない。「ありがとうございました。お大事」

と言つて山口さんは去って行く。順平はおもむろにコロのスイッチを入れる。

——ワン。

### 三十八

コロと暮らしているせいか生き物を飼いたくなくなった。大学の頃、エンゼルフィッシュを掌大まで育てたことがある。サーモスタットの故障で煮魚にしてしまったが……。それ以来引越についてきたコロを別にして、生き物は飼わなかったが、定年後ネオンテトラを飼った。水槽をネオンの海にするのを夢見た。しかし、ある日全部死んでしまった。次



に、メダカを飼った。これは数ヶ月生きたが、また、全部死んでしまった。メダカ一匹飼えない自分が情けなかった。妻が言うのは世話のしすぎ。

——ほっとけば良いのよ

そこまで考えて思いついたのは、金魚。昔何にもしなかったら、鮎みたいになった。子供まで生んだ。そうだ、金魚がええ。金魚鉢と金魚を〇〇さん、思い出せない。「あ」から順番に思い出そうとする。和田さんだった。ああ、しんど。和田さんは金曜日に買い物に行ってくれるヘルパーさんだ。買い物リストの最後に金魚二匹と金魚鉢と書いた。一匹は可哀想だ。雄雌がいいと思ったが分からない場合の方が多いという。

三十九

和田さんは三時の予定だが、いつも五分遅れる。

インターホンに出ると、ぺこんと頭を下げ

る。口数が少ない子だ。三十半ばだが、順平から見れば、子供だ。独身で結婚経験はない。玄関に出て買い物リストを渡すと、黙って受け取り、軽に飛び乗って行ってしまった。スーパーは近いし、買い物は少ないから、四十分は余るだろう。多分スーパーで煙草を一本吸っているのだろう。フードコートには狭い喫煙コーナーがある。和田さんはいつも、煙草のにおいを纏って帰ってくる。

——しかし、スーパーに金魚が売っているだろうか。ペットコーナーがあったような、なかったような……。

卵、牛乳、ちよつと雑炊、ちよつと井<sup>どんぶり</sup>、バス用洗剤、ティッシュ一箱。糖質0のビール七本。

品物を確認して、レシートでお金を払う。金魚も金魚鉢もない。

「金魚と金魚鉢はアマゾンで買ってください。それじゃバイです」

和田さんは去って行った。

——アマゾンで金魚……。

検索すると一杯売っていた。金魚鉢も色々ある。久しぶりに楽しくなった。コロがすり寄ってきた。急速に熱が冷めた。水替え、餌やり、ネオンテトラやメダカの飼育を思い出す。そして、死。肉や魚を食べながらペットの死を悲しむのは、おかしな事だが、悲しいものは悲しい。ペットの中には小さな命がある。それがなくなる。死骸になったペットを順平は家の前の川に捨ててた。自然に帰そう。小さな罪滅ぼしだった。

次の金曜日。

「アマゾンで金魚買いました？」

珍しく和田さんの方から話しかけてきた。

「あったけど、やっぱり面倒くさいから止めた」

それには、答えずに和田さんはスーパーに買い物に行ってしまった。

夕方にまた、和田さんがやって来た。

「これ誕生日プレゼント」

「もう十日も経ってるで」

彼女がくれたのは、金魚鉢に入った二匹の金魚だった。金魚鉢は水槽と違って昔風なものだった。丸い硝子製で上部はフリルになっている。

「うちも金魚飼ってたから」

「金魚は？」

「一匹十円で買ってた」

「ほんなら」

「そんなんいらん」

言い残して、また、軽で去って行った。

順平は、坐卓に金魚鉢を置いて眺めた。金魚以外何もない。穴の開いたような空間だった。

——餌をやらなあかなあ

ご飯粒を三つ四つ落としてみる。

横にコロが来ている。

「お前にはあらへんやろ。命のあるもんはや

っぱりええなあ」

#### 四十一

子供は三人とも相手連れしてきた。そして、結婚を契機に家を出ていった。家は二人きり。一月の末、順平が住んでいる奈良県のバス運転手の感染が確認された。コロナはほん近くまでやって来たと順平は思った。

になった。そんな生活が十四年続いた。夫婦喧嘩もたまにするが昔のように引きずらない。一日経てば原因も忘れてしまう。淡々とした生活が飛ぶように過ぎていった。雑談しながら夕食を食べ、テレビドラマの録画を観た後、妻は二階に上がる。子供たちがいなくなっただけから、順平は一階、妻は二階で眠ることになっている。

未だに妻のことが分からない。妻も同じだと思ふ。

一人でしばらくテレビを観た後、順平も書斎の四畳半に引っこむ。そこで酎ハイ一缶、

糖質ゼロのビール一缶を飲む。コーシヤル  
メールばかりの受信トレイを覗き、ネットで  
ニュースを読み、パソコンで録画したドラマ  
を一本見る。その頃には酔いが回ってくる。  
何かから解放される。寝室に戻る。睡眠剤を  
半分に割り、半分は寢床に入ってから飲み、  
半分は夜中にトイレに起きた時に飲む。それ  
で一日が過ぎる。

寝る前に

——目覚めることがないかもしれない

と一瞬思う。

毎日がその繰り返しだ。

## 四十二

何事も起こらないことは幸せかもしれない。  
しかし胸を満たしている虚無感は拭いようが  
ない。いやな夢を見て、真夜中に目が覚める  
と、死ぬかもしれないという不安が体にのし  
かかる。いやな夢の殆どは調剤している夢だ。  
定年後十四年経っても、仕事の夢から逃げら

れない。そして、朝起きた時、また一日が始まると思えば途方に暮れる。

なんのために生きているのか？

妻はどう思っているのだろうか。話し合ったこともない。ただ自分よりは外とのつながりを楽しんでいる。順平は引きこもり老人である。妻以外と殆ど話さない。

順平には友達がいない。

順平は一日中なんやかや考えている。たいしたことを考えているわけでもない。例えば、糖尿の薬を腹に打つ時、臍のゴマがたまっているのに気づいた。風呂に入る時、掃除しなければならぬとか。触りすぎると腹痛になると子供の時聞いた。誰に聞いたのだろうか。母か父か兄か。本当にそうだろうか？ どうでもいいことを次々考えている。そして、忘れる。

#### 四十三

『眠り』はやっかいなものだ。娘も娘婿も妻

も、人前で熟睡するが、順平には出来ない。通常の眠りでも、殆ど夢を見ている浅い眠りである。金縛りになり、夢から抜け出せないこともある。順平にとって睡眠は休息ではない。

蒲団に潜り込んで、ふと、死んだ自分を想像してみると、生きている順平はとても不思議な動物である。『伊勢物語』最終段を開けて読む。

つひにゆく道とはかねて聞きしかど  
きのふけふとは思はざりしを

「ころ」

と呼んだ。

すぐそば来て、毬で遊びはじめる。

「お前は寝やんでええねんなあ」

コロはごろりと横になる。まぶたを閉じている。頭を撫でてやると、喉を鳴らす。お前は猫か。奇妙な生きものと生活しているような気になった。

秋になると、台風に怯えた。自分が住む奈



良にだけは来ないでくれと祈った。他はどこにでも来てください。冬になるとインフルエンザに怯えた。そして、いつものように大晦日、正月を迎える。

正月二日には一族郎党が集まった。初孫がマニキュアをしていた。「どうしたん。爪から血出てるで」といちびった。誰も笑わなかった。その時はまだ平和だった。

#### 四十四

二〇二〇年は誰も予想もしなかった事が起こった。パンデミックである。

順平にとって初めての戦争だった。武漢で未知のウイルスが流行っているらしいとのニュースから、人から人への感染が確認されたと言うニュースになった。一月末には、武漢市内に、感染者の治療に特化した病院を新設しているという。建設期間はわずか十日間で、病院施設が稼働する見通しだと報じられた。廊下に溢れる患者。防御服に身を包んだ医療

チーム。管につながれた患者の群れ。異様な光景だった。感染者数と死者の数が毎日更新された。ロックダウン（都市封鎖）という映画のような言葉が踊った。映画の世界が現実になったと順平は思った。しかし、その時はまだよそ事だった。

一月二十八日、順平が住んでいる奈良県でバス運転手の感染が確認された。新型コロナウイルスはほん近くまでやって来た。

「おさまってくれ」。「日本に来るな」。「あたたかくなったら消えるよ」。順平の樂觀的な願いはことごとく外れた。

クルーズ船ダイアモンドプリンセス号は二月三日、横浜港に入港した。巨大な舟が、新型コロナウイルスの影のようだった。豪華客船が新型コロナウイルスの温床になった。これさえなければと順平は嘆いた。同じようなことが、二〇一一年にもあった。原発事故さえなければと順平は嘆かなかったか。

NHK特設サイト『新型コロナウイルス』

とヤフーニュースを日に何十回と閲覧する日々が続いた。

四十五

三月。

世界保健機関（WHO）の事務局長が三月一日に、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行を「パンデミックとみなせる」と遅まきながら発表した。三月十一日。東日本大震災の日だ。あれもテレビで見っていた。もう順平の頭の中には痕跡もない。順平の頭の中は自由である。

志村けんがコロナにかかった。テレビの人が感染した。いつもテレビ画面の中にいる男だった。順平より二つ若い。『だいじょうぶだあ』と復帰すると思っていたが、『死んだあ』。

誰にも会えずに焼かれた。

ECMO || 人工心肺装置につながれまま息を引き取ったのだろうか。内緒で運ばれて骨

になった。

テレビには元気な志村けんが踊っていた。順平は、奇妙な世界に迷い込んだ気がした。悪い夢を見ているのだ。華やかな世界だが、彼は幸せだったのだろうか。

四十六

四月

四月七日緊急事態宣言。

四月一六日に、全国に拡大された。映画の世界に自分はいるのでと実感した。コロナで死ぬかもしれない。七十才以上で、糖尿、高血圧の持病がある。若者がばらまいて年寄り死んでいく。先の戦争とは逆かもしれない。因果応報。

不要不急の外出自粛などの行動制限をまったくとらなかつた場合は、流行収束までに国内で約四二万人が感染によって死亡すると専門家が言った。2020年4月15日

四十二万人が死ぬ。順平は恐怖に震えた。

計算が出来なかった。その数字と自分はどうか関係しているのだろうか。七十才以上の持病がある人間となれば、確率は大幅に上がるだろう。数字には顔がない。数が一つ増え同時に名もなき死が一つ増える。順平が死んでもデジタルの数が一つ増えるだけだろう。一日中数字を漁っていると、何が何だか分からなくなる。

毎日朝起きると、「熱なし、咳なし、コロナなし」と声に出して唱えた。

今の時点では順平にとって新型コロナの怖さは「隔離」だった。一階と二階があるよつて、うちは自宅待機やなあと言うと、妻は、「ホテルに行つて」と言った。

ホテルの部屋に隔離。神経が持たないと思う。順平は気の小さな老人である。孤独が好きだった筈なのに、一人で「死」に向かい合うのがたまらなく怖かった。

「わしはホテルはいやや」  
思わず叫んでいた。

四十七

東京が心配である。ニューヨークみたいにならないだろうか。オーバーシュート。街は老人の死体で溢れている。新しい言葉が次々に出てくる。水溜まりにわくポーフラみたいだ。一番最初は濃厚接触者。クラスター。ソーシャルディスタンス。PCR検査。三密。抗原検査。抗体検査。他は忘れた。

とにかく感染しないこと。自分が出来るのは、三密を避けることしかない。密閉、密集、密接。順平は殆ど三密に関係のない生活をしている。その上奈良県では、感染者数は百人以下なのだ。亡くなった人が二人。杞憂かも知れない。でも感染すれば100%なのだ。誰も助けてくれない。妻の行動にも一々口を出した。

「緊急事態宣言なんやで」

子供も来なくなつた。年寄りに気をつかつているのだろう。

『子や孫に会へぬ今年の立夏かな』

小説を諦めて俳句を作っている。幾つも応募したが入選はゼロを更新している。俳句は五七五の世界。才能が肝要と誰かが言っていた。バラエティー「プレバト」を録画して見ているが、「才能なし」の評価があった。どこへ行っても「才能なし」がつきまとう。

#### 四十八

三密の場所に行かなければならない日が近づいている。循環器内科の診察と内分泌内科の薬外来である。内分泌科は短時間で済むが、三ヶ月に一回の循環器内科はそうはいかない。行かなければ薬が足らなくなる。血圧の薬が足らなくなる！それは前から恐れていたことだった。しかし、コロナがこんなに長くなるとは思っていなかった。状況は段々悪くなっている。いつも病院は人で溢れている。座る椅子さえないこともある。隣の患者がコロナかもしれない。一時間近く待って、数秒の

診察。病院のホームページを何度も覗くが、オンライン診察の記事はない。十津川の診療所でもやっているのに。

緊急事態宣言に病院は含まれていない。院内感染が多発しているのに、患者に対する助言は一つもない。病気が悪くなるので行ってください。

病院に掛け合わなくてはと順平は思った。

#### 四十九

受診科に電話がつながった。順平はこう言えばいいのだ。「コロナが怖いから、薬だけ貰えませんか」

話は簡単に通じた。かかりつけ薬局を聞かれた。近所のウエルシア薬局のホームページを用意していた。一回だけ痔の軟膏を出して貰ったことがある。痔の手術（正確に言えばジオン硬化療法）どうでもいいことだが。順平はかなり興奮していた。妻がサポートしてくれる。医師に聞いてからまた電話をすると



いう。「いけそうや」。鬼の首でも取った気分になった。その日の夕方電話があり、診察日の十六時三十分から十七時に医師からの電話でオンライン診察。万歳したい気分になった。内分泌科は行くことになった。速攻に行つて速攻で帰ってくる。妻が車で送つてくれることになった。妻だけが頼りだ。

診察日の十六時三十分きっかり看護師から電話がかかった。次に医師に変わった。いつもの声だ。順平は卑屈に「お手間を取らせました」と繰り返した。問診が終わり看護師から事務手続きの説明を聞くと、また、「お手間を取らせました」と繰り返した。相手の電話が切れるのを確認して、拝むように受話器を置いた。

次の日ウエルシア薬局に薬をもらいに行つた。電話では中年の男だったのに、べっぴんさんの薬剤師が出て来た。髭を剃っていけばよかつたのにと順平は悔やんだ。十数年前は、順平も美人の薬剤師に囲まれていたのだ。本

当に遠い昔のような気がする。定年後一秒も働いていない。そんなことを自慢するなど怒られそうだが。

## 五十

いつになったら、この事態が過去形になるのだろう。まだ終わっていない。始まりかもしれない。

「お尻の穴が痒い」と女の尻が揺れ、女が叫ぶコマーションルを見ていると、コロナよりも異常な気がする。なんとという国に住んでいるのだろう。

順平がよく知っている梅田の交差点は人影がまばらになった。「家にいてください」と吉村知事が繰り返し、「ステイホームと」小池都知事は語りかけた。

テレビ画面の左右の端に一人ずつニュースキャスターが映り、間に二三人がリモート登場するのが普通になった。ドラマの制作が中止された。順平が楽しんでいた大河ドラマも

六月には中断されるという。「半沢直樹」も今だ放送されない。過去のバラエティが放送されている。みんな密着している。これが日常だとすれば、日常が異常だったのかもしれない。本当に日本人は三密が好きなんだ。大声で喋り笑っている。一方、西田敏行がこう言っている。

私たちは「彩りに過ぎない」。俳優の生の声が聞こえてくる。今、順平は彩りのない世界に住んでいる。

世界の感染者四七七万人超 死者三十一万人超。この町の十倍以上の人間が死んでいる。

作者もその渦中にいる。愛する読者もそうだろう。

順平は一日中新規の感染者を追っている。いい加減に止めなければと思うのだが。新しい情報はそれしかない。今日は何人になりそうか。死者の情報は目にとめない。人間は勝手なものだと思う。まだ順平の周りで感染者はいない。次ぎに奈良県の情報に注視する。

どこで発生したか。感染源は？ 病状は？  
奈良県のホームページで辿ることが出来る。  
スーパーのパート。近くのスーパーかとドキ  
リとする。情報に一喜一憂する。

五月下旬、急に新規の感染者が減り始めた。  
気になっていた野球の梨田さんが退院したこ  
とを知った。赤の他人だが、嬉しい。「願わ  
くはこのままコロナは消えて欲しい」と順平  
は神に祈った。二波三波とテレビは言い出し  
ている。順平は耳に栓をしている。

\*

#### 【作者より】

唐突で申し訳ないですが、物語は五年後に  
飛びます。

連載小説「Q」第二部の始まりです。

「Q」が登場します。